

神奈川県環境農政局長賞

「ひとつぶにこめられた思い」

湘南白百合学園小学校

3年 相蘇 仁那

私はお米が大好きです。たきたてのごはんのかおりをかぐと、しあわせな気持ちになります。そんな風を感じるのには、おいしく食べてもらいたいとねがって作る人の思いが入っているからかもしれません。そして、わたしはそんな思いをもった人をしていています。それは友だちのレオナ君のおじい様です。わたしの家で食べているお米はレオナ君のおじい様がつけてくれています。おじい様は山形県の米沢市に住んでいます。わたしの家からは遠いけれど、おいしいお米を作ってくださいとおじい様にお礼が言いたいと思っていました。そして去年の夏に、米沢市まで会いに行くことができたのです。わたしはそこで、たくさんの事を知ることができました。

おじい様のトラックにゆられながら、見たことのない道を進んで行くと、山のふもとにある田んぼに着きました。おじい様の田んぼは、わたしが思っていたよりもずっと広くて、いねが風にゆれる様子は、緑色の海のようにでした。ここで育ったお米がわたしの家にとどいていることが、何だかふしぎに思いました。

米作りは、田植えやいねかりをするだけではありませんでした。がい虫からお米をまもったり、どんどんのびてくるざつ草をかり取らなければいけません。わたしもお手伝いしましたが、暑くてすぐにつかれてしまいました。だけど、おじい様は真っ黒に日やけた顔に、たくさんあせをかきながら、ずっとはたらいていました。おじい様は何も言いませんでした。だけど、わたしたちがいつも当たり前前に食べているお米には、色々な人の一生けん命な思いがつまっていることを教えてくれました。たったひとつのお米にも数えきれない人たちのど力があるのだと思いました。

「いただきます。」お米にむかってそうつぶやくたびに、わたしは日にやけたおじい様のやさしいえ顔を思い出すのです。